

山宿年表

山宿年表

明治以降

年号	干支	西曆	山下町	西上町	東下町	出丸町	大工町	東上町
明治一	戊辰	一八六八	(孝明天皇慶応二年二月二五日(一八六七年一月三〇日)崩御(三六才)服喪期間中につき曳山なし。) (凶作につき山曳かず) (飢饉年につき山曳かず、庵は出す)					(飾山)次左衛門
二	己巳	一八六九						(飾山)与八郎
三	庚午	一八七〇						(飾山)宮岡宇兵衛
四	辛未	一八七一						荒木文平
五	壬申	一八七二						米原平右衛門
六	癸酉	一八七三						宮岡宇兵衛
七	甲戌	一八七四						丸岡吉左衛門
八	乙亥	一八七五						大田原理右衛門
九	丙子	一八七六						千川久左衛門
一〇	丁丑	一八七七						長谷川弥七
一一	戊寅	一八七八	笹井作平	大岡小兵衛 丸川伊三郎 溝口左平 土井佐平次 田村與平 町内山番 大岡小兵衛宅 町内山番 村理兵衛宅				小原治五右衛門
一二	己卯	一八七九	富井彦市					藤井善右衛門
一三	庚辰	一八八〇	山本三右衛門					宮岡伊三郎
一四	辛巳	一八八一	大瀬吉助					千田与平次
一五	壬午	一八八二	高田甚三郎					田川宗右衛門
一六	癸未	一八八三	北崎新七					吉村甚右衛門
一七	甲申	一八八四	山村十右衛門					宮永八吉郎
一八	乙酉	一八八五	町内山番 石崎新兵衛宅					荒木文平

山 宿 年 表

明治 一九	丙戌	一八八六	町内山番 丸川栄藏宅	町内山番 本井 與三吉宅			伊藤 勝左衛門
二〇	丁亥	一八八七	岸 加市	岩崎 清右衛門			栗山 新右衛門
二一	戊子	一八八八	松島 榮造	小竹 義七			原 甚藏
二二	己丑	一八八九	高橋 伝次	真田 嘉右衛門			米原 久次郎
二三	庚寅	一八九〇	増山 庄藏	(米価騰貴につき曳山せず、飾り山。庵は出す。)			米原 平右衛門
二四	辛卯	一八九一	巻田 甚六	松野 外五郎	森崎 弥亮		小原 惣市
二五	壬辰	一八九二	舟見 磯右衛門	千原 和三郎	松井 作次郎		北林 權次郎
二六	癸巳	一八九三	大井 喜一郎	山下 喜助	川那辺 庄三郎		野村 小兵衛
二七	甲午	一八九四	丸川 榮藏	澤田 與丞郎	川那辺 庄三郎宅		田川 久太郎
二八	乙未	一八九五	浅野 森之助	林 伊次郎	町内山番 池田勘造宅		村井 弥三郎
二九	丙申	一八九六	中川 甚太郎	岸 辰次郎	伊藤 左衛門	岸 与右衛門	池田 藤太郎
三〇	丁酉	一八九七	(中越鉄道が一〇月三〇日に城端駅まで開通につき、	(秋まで祭を延期したが大凶作のため、曳山中止。)			
三一	戊戌	一八九八	(四月一五日城端大火。全戸数の三分の一を焼失したため曳山祭中止。大工町曳山焼失)				
三二	己亥	一八九九	田中 加左衛門	林 伊次郎	泉川 栄藏	大工町飾り山のみ	荒木 文平
三三	庚子	一九〇〇	松田 榮藏	中川 文藏	土生 與藏	"	米原 平右衛門
三四	辛丑	一九〇一	町内山番 田尻外吉郎宅	西村 甚太郎	篠井 萬三郎	谷口 豊平	荒木 文平
三五	壬寅	一九〇二	堀川 理吉三	岩崎 清右衛門	笹田 喜一郎	井波 庄太郎	米原 清一郎
三六	癸卯	一九〇三	田中 為次郎	布崎 新右衛門	岡部 宇右衛門	最住 清右衛門	千川 久太郎
三七	甲辰	一九〇四	笹井 精一宅	野村 理兵衛	篠井 萬三郎	谷口 豊平	(日露戦争のため、曳山なし。各町飾り山のみ)
三八	乙巳	一九〇五	(日露戦争中につき曳山祭中止)				
三九	丙午	一九〇六	金田 卯一郎	澤田 與丞郎	吉村 甚右衛門	町内山番 洲崎丈太郎宅	松嶋 栄作
							井口 作藏

明治	四〇	丁未	石崎庄太郎	野村理兵衛	河合弥市郎	洲崎丈太郎	中谷吉三郎	宮岡幸次郎
四一	戊申	北永久太郎	森井利藏	都山喜一郎	谷口豊平	田島甚七	宮岡伊三郎	
四二	己酉	齊藤弥太郎	野村辰太郎	日野平右衛門	岸与右衛門	増山弥作	小柴喜太郎	
四三	庚戌	岡村理三郎	布崎新右衛門	川井栄藏	洲崎永之助	三由嘉一郎	浅野辰次郎	
四四	辛亥	今村弥一郎	大岡小兵衛	町内山番 篠井萬三郎宅	最佳清右衛門	浅地栄藏	金村伊佐	
大正	一	壬子	安谷文藏	宮岡卯八郎	和田善一	川那辺吉三郎	細木米次郎	梅本与一郎
二	癸丑	(明治天皇明治四五年(一九一二)七月三〇日崩御(六一才)。服喪期間中につき、曳山祭中止。)						
三	甲寅	(四月一日、昭憲皇太后崩御につき曳山なし)						
四	乙卯	笹井精一	野澤伊三郎	神田源治	堀越源右衛門	金田嘉作	芳里富義	
五	丙辰	松島又治	溝口理市郎	町内山番 和田善一宅	川西弥太	山本亥之助	荒木友吉	
六	丁巳	石崎新右衛門	渡辺次三郎	野村理太郎	松本伊兵衛	山本吉右衛門	和田安之助	
七	戊午	山下清次郎	沼口兵太郎	田島久次郎	栃折左太郎	野原ちよ	高畑多吉	
八	己未	神澤銀行城端支店	小柄勇藏	米原久一	岸のぶ	長尾栄次郎	米田佐一郎	
九	庚申	本折友吉	河合常次郎	山名太郎兵衛	岩崎米次郎	野村理兵衛	伊藤巳之助	
一〇	辛酉	今井他八郎	尾山喜太郎	棚田七次郎	岸義一郎	野村理兵衛	千原治吉	
一一	壬戌	荒木才治	岩崎順二	竹内伊三郎	岩崎助次郎	高畑弥三郎	米原文藏	
一二	癸亥	和田吉太郎	酒井文次郎	池田作平	谷口孝一	中野孝一	荒木清作	
一三	甲子	能崎治吉	細川與八郎	千田平三郎	安居孝一郎	岡村宅跡	倉谷文藏	
一四	乙丑	堂前和三郎	勇崎栄藏	平田卯太郎	谷口孝一	細川德太郎	大岡理三郎	
昭和一	丙寅	澤田常次郎	木村平作	千田安太郎	中村直次郎	中谷宗次郎	岩崎安太郎	
二	丁卯	(大正天皇崩御、服喪期間中につき曳山なし。)						
三	戊辰	野村理一郎	石田常吉	笹田外次	泉川理市	佐藤和三郎	徳永太八郎	

山宿年表

昭和	四	己巳	一九二九	広田	与亟	矢部	富之助	松平	恒次郎	庄田	作次郎	谷口	孝一	山下	清之			
	五	庚午	一九三〇	松島	直治	有川	小太郎	嶋谷	文吉	芳里	富義	細島	常藏	浅野	辰次郎			
	六	辛未	一九三一	大井	常次郎	南	幸次郎	谷村	要吉	大鋸	與吉	谷	幸四郎	米原	平一郎			
	七	壬申	一九三二	藤田	助次郎	長谷川	禮造	岡田	与藏	瀬川	勝太郎	中谷	喜市郎	村田	庄一郎			
	八	癸酉	一九三三	堀川	理吉三	山下	清次郎	篠井	多喜雄	宮崎	権藏	野村	理兵衛	岩崎	順二			
	九	甲戌	一九三四	増山	善藏	田中	為	浅野	利吉郎	洲崎	哲二	松嶋	榮作	岸	佐太郎			
	一〇	乙亥	一九三五	金田	卯一郎	野村	淳	大西	助太郎	田代	弥一郎	長田	常吉	伊藤	巳之助			
	一一	丙子	一九三六	健名	常次郎	山下	加平治	橋本	他八郎	岩渕	理吉郎	杉井	文次郎	竹林	嘉一			
	一二	丁丑	一九三七	石崎	庄太郎	宮本	次吉	吉村	甚右衛門	川西	源治	濱田	文藏	宮岡	宇平次			
	一三	戊寅	一九三八 (宿不 明)	町内山番		町内山番	沼口匡助宅	篠井多喜雄宅	芳里富義宅	町内山番	野村理兵衛宅	町内山番	野村理兵衛宅	宮岡	周三郎			
	一四	己卯	一九三九	堀川	理吉三宅	町内山番	橋爪教順宅	野村理太郎宅	田代弥一郎	町内山番	野村理兵衛宅	町内山番	野村理兵衛宅	土山	他三郎			
	一五	庚辰	一九四〇	荒木	良之助	町内山番	淳宅	畑	栄三郎	栃折	左太郎	町内山番	杉井文次郎宅	杉本	幸作			
	一六	辛巳	一九四一	町内山番	嶋	辰一宅	野村	外代雄	町内山番	日野静夫宅	洲崎	哲二	中谷	宗次郎	伊藤	正信		
	一七	壬午	一九四二	町内山番	沢田	常太郎	片山	才一郎	高井	栄松	岸	義一郎	町内山番	細川	德太郎	中川	外男	
	一八	癸未	一九四三	町内山番	金田	卯一郎宅	野村	淳宅	町内山番	吉村甚右衛門宅	岸	孜宅	町内山番	野村理兵衛宅	宮岡	宇平次宅	宮岡	周三郎宅
	一九	甲申	一九四四	町内山番	松井	藤次郎宅	野村	淳宅	太田	栄一郎	町内山番	岩崎	米次郎宅	町内山番	金田	健治宅	宮岡	周三郎宅
	二〇	乙酉	一九四五	町内山番	松井	藤次郎宅	野村	淳宅	藤沢	太四郎	町内山番	泉川	理市宅	町内山番	野村理兵衛宅	岸	修二	
	二一	丙戌	一九四六	山本	憲孝	町内山番	宮本	次吉宅	竹部	竹次郎	瀬川	理一郎	松嶋	榮作	伊藤	正信		
	二二	丁亥	一九四七	相地	善太	中川	文平	杉本	幸作	中村	辰次郎	野村	理兵衛	中田	勝藏			

昭和三十三	戊子	一九四八	最住勝太郎	森井利藏	高内山藩 栄松宅	栃折左太郎	猪谷栄藏	古野左一郎
昭和三十四	己丑	一九四九	佐竹辰一郎	宮岡卯八郎	笹田喜作	浜谷栄太郎	金田健治	岡山菊太郎
昭和三十五	庚寅	一九五〇	本谷初太郎	天富直次	吉村甚吉	畑山栄作	中谷宗次郎	土山他三郎
昭和三十六	辛卯	一九五一	松林清左衛門	上田幸一	笠本仁作	堀越秀雄	中川元次郎	棚田精作
昭和三十七	壬辰	一九五二	野松友次郎	河合弥七	沢田治平	安居憲一	川辺栄三郎	井波市造
昭和三十八	癸巳	一九五三	酒井文之助	大西善藏	又葉文吉	安居豊次郎	岩城吉藏	谷崎武雄
昭和三十九	甲午	一九五四	今井兼嗣	中川安太郎	南貞次	尾田佐一郎	伊東安太郎	山本義信
昭和四十〇	乙未	一九五五	今井英三	野村誠四郎	山名六郎平	大鋸与一郎	高宮外次郎	梅本正義
昭和四十一	丙申	一九五六	山田伊三郎	佐竹辰一郎	嶋栄一	是安義太郎	谷村直之	大岡理佐久
昭和四十二	丁酉	一九五七	山崎清藏	松井藤次郎	岡部宇一	安居誠治	橋本衆次郎	村田英一
昭和四十三	戊戌	一九五八	池田辰二	河合豊二	牧正一	洲崎哲二	佐藤佐七	岩崎章
昭和四十四	己亥	一九五九	桜井末次	町内山藩 村誠四郎宅	三都井金次郎	矢島光治	細島勇	瀬川為次郎
昭和四十五	庚子	一九六〇	米原金治郎	宮岡淳三	細川外次郎	安居豊作	山本桂一	水口政秀
昭和四十六	辛丑	一九六一	田村泰治	金島あや	庄田恒次郎	岩崎一夫	金田健治	倉谷常藏
昭和四十七	壬寅	一九六二	沢田一雄	町内山藩 天富直次宅	西野俊雄	岸信三	中川元次郎	米原栄藏
昭和四十八	癸卯	一九六三	富井栄太郎	蔵田幸作	林宏彦	岩崎米一	谷幸四郎	野村孝吉
昭和四十九	甲辰	一九六四	嶋辰一	谷口秀一	和泉喜一郎	町内山藩 岩崎米一	谷幸四郎	野村孝吉
昭和五十〇	乙巳	一九六五	藤井藤作	田代久二	齐藤竜一	小原為治	猪谷栄藏	篠井忠一
昭和五十一	丙午	一九六六	安谷文伸	町内山藩 天富直次宅	出井忠良	栃折雄次	中谷庄治	伊藤克巳
昭和五十二	丁未	一九六七	石崎正二	町内山藩 天富直次宅	木村辰次	洲崎元丸	山本文吉	杉井範夫
昭和五十三	戊申	一九六八	高木義雄	清部篤次	末永勝平	河合豊市	町内山藩 中谷庄治宅	長田二吉

山 宿 年 表

昭和		
四四	己酉	一九六九
四五	庚戌	一九七〇
四六	辛亥	一九七一
四七	壬子	一九七二
四八	癸丑	一九七三
四九	甲寅	一九七四
五〇	乙卯	一九七五
五一	丙辰	一九七六
五二	丁巳	一九七七
經田 乙作	松島 直重	細川 正治
山下 慶治	梅本 富成	勇崎 理一郎
松原 平一郎	山下 慶治	藤田 庄吉
谷村 重成	平田 隆	溝口 喜一郎
山田 善治	山下 鉄次	町内山番民
山本 孝	金田 栄三	中川 順二
千原 正美	藤崎 仲夫	畔田 秀雄
高沢 賢太郎	岸 佐市	岩崎 越彦
松田 正吉	和 田 安三	宮 松 原
石崎 義弘	盛田 幸作	松 嶋 外茂治
川那辺 定一	泉 川 哲夫	明石 平永治
加藤 三男	安 居 誠治	公 民
稲場 辰治	中 川 順二	金田 栄三
佐藤 貞次	谷 崎 喜作	石崎 義弘
佐藤 次	谷 崎 喜作	盛田 幸作
上野 次平	藤田 庄吉	長谷川 仁太郎
野村 豊二	大西 正重	井上 義堯
金島 重雄	杉本 幸治	松平 良雄
長谷川 文雄	山下 重之	松平 良雄

城端曳山史年表

年号	干支	西暦	事 項
大宝 二	壬寅	七〇二	越中の二字、初めて正史にあらわれる。
和銅 三	庚戌	七一〇	越中国砺波郡川上里から腊一斗五升を貢納する。
天平 一八	丙戌	七四六	大伴家持越中守として来任。在任六年間。その頃の城端地方は河上（加波加美）と呼ばれていた。
大同 二	丁亥	八〇七	この頃から延喜一〇年（九一〇）にかけて、砺波郡川上村に官倉の存在したことが記録されている。
承暦 二	戊午	一〇七八	これより以前、石黒荘が仁和寺に施入する。
寿永 二	癸卯	一一八三	源義仲越後から越中に入る。これに河上氏参ず。
元久 元	甲子	一二〇四	源頼家山田郷に地頭補任、仁和寺の抗議により停止される。
承久 三	辛巳	一二二一	河上氏・石黒氏共に京方に属し敗れる。
延応 元	己亥	一二三九	誓願房心定が越中国細野で阿聖より立川流の教旨を受法する。
弘安 六	癸未	一二八三	仁和寺菩提院了遍、石黒荘の山田・弘瀬郷を禅助法印に譲る。
同 九	丙戌	一二八六	石黒荘内直海郷に対する伊勢外宮造営の役夫工米宛課が免除される。
興国 二	辛巳	一三四一	南朝、大光寺郷を侍従房弁祐に与える。南朝の畑時能、越前鷲ヶ峰で戦死、その一族越中五か山に入り、その後、砺波郡大鋸屋に移住したと伝える。
同 三	壬午	一三四二	宗良親王・越後より越中へ入国。
正平 五	庚寅	一三五〇	桃井直常・井口城に北朝方の将鹿草出羽守を攻めてこれを破る。これより正平二〇年頃までこの地方は南北両朝争奪戦の渦中にあり、城端地方は徹頭徹尾南朝方に属す。
明德 元	庚午	一三九〇	本願寺五代綽如、井波に瑞泉寺を創立。野田新田に小社を建立。これが西新田神明社の前身とい

文安 元	甲子	一四四四	う。 緯如の曾孫運真・加賀河北郡井家莊砂子坂に住む。これが善徳寺の発祥で、文安二年ともいう。 鷹司家より直海、大光寺両郷の年貢の内三〇貫文を僧清承に下付。 鷹司家、直海・大光寺両郷を質入、三〇貫文を借錢。この年、応仁の乱始まる。 その頃、本願寺八代蓮如砂子坂を訪れ一寺を建て、運真に付属させる。これを善徳寺の始まりとし、第一世蓮如・第二世運真とする。蓮如に随行の佐々木入道祐玄が越前より砺波郡梅原村に来住したと伝える。 この春、福光城主石黒右近光義、富樫政親に党し、一向一揆と戦い山田川畔田屋河原で敗れる。 六月、加賀・越中の一向宗徒、富樫政親を高尾城に攻め、政親敗死す。 善徳寺第三世実円のとくに、砂子坂より越中石黒莊法林寺へ、さらに山本村へ移る。善徳寺の寺号は、この代に、本願寺九代実如より与えられたともいう。 將軍足利義晴と本願寺の和睦を祝し、河上十郷より本願寺へ八〇貫文の祝儀を進上。 善徳寺第四世円勝が子息尊千代を本願寺に上せ、ついで本願寺一〇代証如により得度をうけ、その法名を祐勝（善徳寺第五世）とする。その頃、善徳寺は山本村より福光に移る。 「色紙和讃」開版。この時の色紙和讃で今に残るもの二。その一を善徳寺に所蔵する。 「城端善徳寺由緒略書」には、この年に善徳寺が城端城主荒木大膳の招請で福光村より城ヶ端へ移住したとある。このとき真覚寺も山本村より城端へ移転。 一〇月、石山本願寺が織田信長に對抗、石山戦争が始まる。 この年に城端開町の説もある。 城端開町。「善徳寺由来」には、この年に国主荒木善太夫の命により福光から城端へ善徳寺が移転したとある。山田の市（四の日）、井口の市（十の日）が移転、城端の上町の市が開設される。佐々木祐玄の曾孫又兵衛（之綱）が城端に移住。畑治五右衛門（好永）が大鋸屋より城端へ移住した。この年、室町幕府滅亡。
寛正 三	壬午	一四六二	
応仁 元	丁亥	一四六七	
文明 三	辛卯	一四七一	
同 七	乙未	一四七五	
同 一三	辛丑	一四八一	
長享 二	戊申	一四八八	
文亀 元	辛酉	一五〇一	
同 三	癸亥	一五〇三	
天文 五	丙申	一五三六	
同 六	丁酉	一五三七	
同 二〇	辛亥	一五五一	
永祿 二	己未	一五五九	
元亀 元	庚子	一五七〇	
同 三	壬申	一五七二	
天正 元	癸酉	一五七三	

天正二	甲戌	一五七四	城ヶ端神明社北野村伊勢領より遷座。現在の神明宮がこれである。
同三	乙亥	一五七五	佐々木又兵衛が城端塗を、畑治五右衛門（好永）が城端蒔絵を創始したと伝える。
同四	丙子	一五七六	善徳寺空勝（第六世）石山本願寺に馳せ参す。
同六	戊寅	一五七八	四月、織田信長が神保長住を助けて越中に還らせ、美濃の斉藤利次を派遣して共に上杉方と戦う。この年に城端神明社へ時の城代斉藤光次（当時婦負城主の斉藤次郎右衛門尉信和の二男）が社領を寄進したと伝える。上杉謙信死す。
同八	庚辰	一五八〇	閏三月本願寺一代顕如、織田信長と和睦（石山戦争終わる）。本願寺新門教如が父の顕如と対立善徳寺空勝は教如に忠誠を尽す。四月一日、顕如は瑞泉寺を通じて河上・五箇山の惣門徒衆へ和睦の事情を伝える（城端の瑞泉寺に顕如から来た書状がある。）。
同九	辛巳	一五八一	九月、織田信長が越前にあつた佐々成政を越中に移し、神保長住を助けさせる。
同〇	壬午	一五八二	六月、井波瑞泉寺、佐々成政の兵火に罹り北野村へ移転。
同	乙酉	一五八五	善徳寺は本願寺新門教如が五ヶ山方面に来たことを上杉景勝に報じ、四月八日に景勝は善徳寺へ書状を送り、挙兵をすすめる。六月本能寺の変。
同			二月前田利家蓮沼城を襲う。佐々の將城端城代河地才右衛門らは出旗してこれを防いだが落城。
同			八月、成政剃髪して呉羽山の秀吉陣に降り、前田氏進駐。八月、前田利勝（後の利長）北野村へ市場の御印を授ける。
文禄三	甲午	一五九四	一月前田利長が与兵衛等五人の大功に井波大功の名儀で屋敷を与える。
同四	乙未	一五九五	七月越中ごとく前田利長の領土となる。宗林寺が建立されたと伝える。
慶長元	丙申	一五九六	瑞泉寺が北野村から藤橋村に移転。
同三	戊戌	一五九八	六月絹布の丈尺を定め、京尺で絹は二丈五尺、布は二丈八尺とする。
同四	己亥	一五九九	一月に与助等五人の鍛冶に屋敷地を与える。
同七	壬寅	一六〇二	教如が東本願寺を創立。善徳寺第六世空勝は教如に従い東派に属す。
同九	甲辰	一六〇四	八月前田利長砺波郡川上に放鷹し善徳寺に二泊。この年、城端下町の市（七日）の開設が許さ

同 五	寛文 四	明暦 二	承応 三	同 四	慶安 二	同 四	同 二	正保 元	同 一〇	同 一六	同 一四	同 一三	寛永 三	元和 九	慶長 一五
乙巳	甲辰	丙申	甲午	辛卯	己丑	丁亥	乙酉	甲申	癸未	己卯	丁丑	丙子	丙寅	癸亥	庚戌
一六六五	一六六四	一六五六	一六五四	一六五一	一六四九	一六四七	一六四五	一六四四	一六四三	一六三九	一六三七	一六三六	一六二六	一六二三	一六一〇
<p>れる。</p> <p>この年に高岡の曳山車が創始されたと伝える。</p> <p>三月に大火があり、下町の市は一時退転。</p> <p>絹判賃銀が定められる。</p> <p>四月一〇日より城端宿並の定めあり、代官は九里九郎兵衛。この年、町肝煎に吉田屋藤右衛門、島田七郎兵衛の二人が任命される。三月に塗師屋初代又兵衛（之綱）死去八七才。</p> <p>代官に加藤新右衛門。この年に城端町が今石動町奉行の支配下におかれる。一説に寛永一七年ともいう。町奉行は篠嶋豊前清長。</p> <p>前田家四代光高襲封。利次を富山に、利治を大聖寺に分封。</p> <p>布判押人に木薬屋与兵衛、吉田屋藤右衛門が任命される。</p> <p>七月小松中納言前田利常が城端へ巡狩、旅館は黒田屋与次兵衛。</p> <p>五代前田綱紀が襲封、利常が後見。</p> <p>絹判押人が業者の中から出るようになる。</p> <p>西新田町立。城国寺、法乗寺（法はもと宝の字、元禄年中より法に改める）建立。</p> <p>東新田町開立。教念寺、瑞泉寺建立。</p> <p>改作法着手。</p> <p>塗師屋（三代）徳左衛門が畑治五右衛門の子孫宜安より唐人伝来の密陀僧の秘法を伝授される。</p> <p>徳左衛門これにもとづき白漆蒔絵の名をもって世に広める。畑氏はこれより医を業とし桜井氏を称する。</p> <p>改作法施行。五月に伝栄寺が大鋸屋村より西上へ移転。</p> <p>前田綱紀七月一〇日城端へ来町。七月一三日二俣越えて帰る。宿は黒田屋。町奉行篠嶋豊前清次この年に浄念寺が砺波郡鹿島村より城端へ移転。</p> <p>初めて町年寄が任命される。黒田屋与次兵衛、絹屋庄兵衛等五人。一説に寛文六年正月からとも</p>															

寛文 八	戊申	一六六八	初めて算用聞が任命される。荻田屋万右衛門。
同 一〇	庚戌	一六七〇	改作法の例外として五ヶ山への貸付が認められる。
延宝 四	丙辰	一六七六	塗師屋（二代）六右衛門（達仲）死去。八〇才。
天和 元	辛酉	一六八一	幕府の巡見上使来町。天和年間に京都の近岡氏が神明宮へ「坂上田村麿蝦夷征伐」の絵額を奉納。
貞享 二	乙丑	一六八五	城端神明宮の社殿再建。この年前田綱紀が京都の東寺に百合の書画を寄進。
同 三	丙寅	一六八六	城端下町の市が復興。
元禄 元	戊辰	一六八八	善徳寺の追手門建立。文政年間に砺波郡苗加村の万福寺へ譲渡。（富山県文化財指定）加賀藩に盗賊改方設置。元禄年間に前田綱紀の「百工比照」が成り、城端塗がその選に入る。
同 五	壬申	一六九二	神明宮に加賀藩祐筆山本源右衛門筆の「大神宮」の額ができる。放生津の曳山創始と伝える。北野村海乗寺の甥山伏常専が神明宮守となる。
同 六	癸酉	一六九三	切高仕法発令。七月「組中人々手前品々覚書帳」成る。戸数六八六、人口三八〇九人。
同 八	乙亥	一六九五	蕉門の奇人路通来町。「城端附近名所十景」成る。そのうち一卷現存。
同 一二	己卯	一六九九	塗師屋（三代）徳左衛門（信好）死去。八二才。
同 一三	庚辰	一七〇〇	町奉行に篠嶋主馬清英が就任。
同 一四	辛巳	一七〇一	蕉門十哲の一人東花坊支考来町。善徳寺で納涼句会を開く。「東西夜話」を作る。
宝永 元	甲申	一七〇四	絹押判人と布押判人が兼任で置かれるようになる。
同 四	丁亥	一七〇七	富山の山王祭に曳山九本ありという。
同 七	庚寅	一七一〇	巡見上使来町。町奉行に塩川安左衛門が就任。
正徳 元	辛卯	一七一〇	八月、初めて糸絹仲人肝煎が任命される。
同 二	壬辰	一七一一	砺波郡大西村に農民騒動が起きる。
同 三	癸巳	一七一二	三月、城ヶ端氏子神明宮へ石燈籠を寄進。
同 五	乙未	一七一五	四月、東新田町に大火、六三軒を焼く。五月、金戸村専徳寺焼失。

城端曳山史年表

年号	干支	西暦	事		
中央・地方	祭	札・曳山	郷土		
享保元	丙申	一七一六	八代將軍吉宗就任。	西下町堯王像出来。作者木屋五郎右衛門（木屋仙人ともいう）	針口懸座、絹頭を任命。善徳寺
同 二	丁酉	一七一七	巡見上使来町。	城端神明社に神輿出来。	第一二世に速満院真源入寺。
同 四	己亥	一七一九	八月、曳山出来。春日神輿出来。装束踊あり。	出丸町曳山・高砂山出来。	塗師屋四代亮好死去。七四才
同 五	庚子	一七二〇	六代前田吉徳襲封。	神輿の巡幸に曳山が初めて供奉する。（曳山祭開始）	上町の市が復興。城端の戸数七八五、人口四〇二二。
同 八	癸卯	一七二三	町奉行に山崎九郎右衛門が就任。	八月、町奉行山崎九郎右衛門が曳山祭に来町。町奉行の指示で翌年より祭札曳山を中止。	
同 九	甲辰	一七二四			
同 一〇	乙巳	一七二五			
同 一二	丁未	一七二七	町奉行に中黒六左衛門		この年、貸米四四〇石あり。
同 一八	癸丑	一七三三	三清組の騒動起こる。		繰屋懸機仲人が任命される。
同 一九	甲寅	一七三四		城端神明社に神輿堂ができる。	荒木和助生まる。
元文元	丙辰	一七三六	金沢町に大火あり		善徳寺一三世至徳院真誓入寺
同 三	戊午	一七三八		神明・春日・八幡の御尊体が寄進される。	塗師屋五代貞好死去、七三才
同 五	庚申	一七四〇		神明宮の社額（縦額）寄進される。	

寛保元	同 二	延享元	同 二	同 三	同 四	寛延元	同 三	宝暦二	同 三	同 四	同 五	同 六	同 七	同 八	同 九	同 一〇
辛酉	壬戌	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	庚午	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰
一七四一	一七四二	一七四四	一七四五	一七四六	一七四七	一七四八	一七五〇	一七五二	一七五三	一七五四	一七五五	一七五六	一七五七	一七五八	一七五九	一七六〇
八尾町の曳山祭始まる	町奉行に富田次太夫	町奉行に津田木工	九代將軍徳川家重就任	七代前田宗辰襲封。	巡見上使来町。	八代前田重熙襲封。町奉行に前田源五左衛門大槻朝元五ヶ山へ流刑	町奉行に不破忠太夫	今石動御坊町の曳山が城端大工町で製作。	九代前田重靖襲封。	一〇代前田重教襲封。	銀札発行。巡見上使来町。	四月より銀札くずれ。	町奉行に金森多門。城端騒動（北市騒動）	金沢町大火一万戸焼失	一〇代將軍に徳川家治	町奉行に武田判太夫。
東下町の黒大黒御面像箱絵ができる。																
善徳寺本堂の新始め。野下町、今町火事、二七軒類焼。																
西下町に火事、一〇軒焼失。																
その頃、善徳寺一四世欣求院真勝																
善徳寺御堂再建の石突始まる																
城端騒動関係者の処罰。																
善徳寺御堂の上棟式。																

同 四 乙未 一七七五	同 三 甲午 一七七四	安永 二 癸巳 一七七三	同 八 辛卯 一七七一	同 四 丁亥 一七六七	同 三 丙戌 一七六六	明和 二 乙酉 一七六五	同 一二 壬午 一七六二	宝暦 一一 辛巳 一七六一
町奉行に前田数馬就任 曳山車訴訟の取調べが			一一代前田治脩襲封。 町奉行に藤田弾正が就 任。				井波大火、瑞泉寺類焼	巡見上使来町。
屋治五右衛門等七名、魚津の改方役所へ	東下町宝槌出来。 四月、東下町大黒天像出来。和助四一才。	東上町寿老像出来、唐津屋和助四〇才。 東上町庵屋台原型出来、七代目治五右衛 門四五才。	三月、西上町恵比須像を八尾町西町へ譲 る。(八尾町の記録)	八月出丸町布袋像の腕の留木改造。一二 月西下町堯王像の胴を新調。木屋兄弟、 和助三二才の合作。	八月出丸町布袋像の腕の留木改造。一二 月西下町堯王像の胴を新調。木屋兄弟、 和助三二才の合作。	八月東下町の脇人形出来。和助三二才の 作。	出丸町の曳山の地山が坂の下へ落ちて、 町中の大工が出て修理したと伝える。 出丸町の布袋山出来。この年に布袋像も 出来たと考えられる。唐津屋和助二九才 の作。	
善徳寺一五世横超院真央(含 山)入寺。出丸町延命地藏建		忠好死去。六八才。	西新田町に火事、九軒類焼。 五月善徳寺鐘楼再建の新始め 六月より殿村屋(唐津屋)和 助、楽焼を作り始め五牛と号 す。水月庵建立。塗師屋六代				善徳寺で祖師五百年忌大法要 李夫が城国寺境内に芭蕉蓑毛 塚を建てる。	

同 四	同 三	天 明	同 六	同 七	同 八	安永 五
壬子 一七九二	辛亥 一七九一	元辛丑 一七八一	丁酉 一七七七	戊戌 一七七八	庚子 一七八〇	丙申 一七七六
藩校明倫堂、経武館落	町奉行に遠田誠摩就任の助が就任。	その頃出町曳山始まる	前藩主前田重教来町。	町奉行に奥野主馬。	寺西彈正に命ぜられる二月一七日、放生津車に判決。二月二十六日城端車取調べ。	二月一七日、放生津車に判決。二月二十六日城端車取調べ。
荒木直暢（唐津屋和助）「八島合戦図」の	東上町曳山の後屏「鶏阿和勢稚遊」新調。	八月、新町の傘鉾出来。和助四八才、藩より銀四百貫を貸与され、金沢で製陶に従事。	東上町、寿老人の「王羅冠」を改める。	城端神明宮「惣社」の記録あり。名工烏伯の「竹に鶏」の本殿玉垣彫刻できる。	神明社絵額「牛の尾を引く図」奉納、画工唐津屋和助五四才。	出頭。大工佐右衛門、発病のため帰る。一月二十四日治五右衛門以外魚津より帰町。二月一七日、曳山車を魚津へ出発させる六月一日、治五右衛門釈放される。
	町奉行改田主馬、上使に対する無礼の責を負って自殺。	今町に火事、六〇戸焼失。	城端の戸数九〇五、人口三七一人。このうち絹商売二一九。	杉坂尚庸「城端之記」を作る。	善徳寺南方に火除用心水溜り池できる。西新田町に火事、七軒焼失。	立。

寛政 七	乙卯	一七九五	成。	繪額を神明絵馬堂に掲ぐ。 上町の恵比須像出来。唐津屋和助六二才。	
同 八	丙辰	一七九六	大工町の関羽・周倉像出来。和助六三才。	唐津屋和助自画像を画き、有二斎嵩平これに讃する。	
同 一〇	戊午	一七九八	東下町曳山後屏「陶淵明醢醢澆醢ノ図」を入れる高欄ができる。	城端天満宮へ発句額を奉納。 石動町本行寺へ発句額を奉納 閏四月、善徳寺山門新始め。	
同 一一	己未	一七九九	西村太冲明倫堂に出仕		
同 一二	庚申	一八〇〇			
享和 元	辛酉	一八〇一	町奉行に井上勘右衛門	神明社の八幡神興建立。	
同 三	癸亥	一八〇三	町奉行に高島五郎兵衛		
文化 元	甲子	一八〇四	町奉行に奥村源左衛門		
同 二	乙丑	一八〇五		出丸町の脇人形、旗持童子の箱を改め、 笛吹童子も改める。	塗師屋七代、稀雄死去、七七才。 「白花集」を編纂。唐津屋和 助死去、七三才。
同 三	丙寅	一八〇六			「蓮の実集」を編纂。
同 四	丁卯	一八〇七			善徳寺山門上棟式。天井絵「天 人舞楽の図」荒木春栄作。
同 六	己巳	一八〇九	町奉行に篠原頼母。	東下町黒大黒の小槌出来。	四月一七日、城端大火。 小原一白が水月庵境内に蓮子 塚を建立。
同 七	庚午	一八一〇	改作方復古に関する趣 旨を公示。	神明宮神興新調、八代治五右衛門宗好（一 白）春日宮神興修復。	塗師屋八代一白死去、五〇才
同 九	壬申	一八一二		東下町の黒大黒天寶槌を作成。 四月、町奉行が城端惣社神明宮に参拝。	有沢東海福光で死去、五六才
同 一〇	癸酉	一八一三			
同 一二	乙亥	一八一五			
同 一三	丙子	一八一六	町奉行に富田外記就任		

文化一四	丁丑	一八一七	町奉行に本多式部就任	海乗寺の弟子円立坊が林蔵院を襲跡する	
文政元	戊寅	一八一八	加賀藩産物方主附に宮脇屋甚六を登用。		
同三	庚辰	一八二〇		東上町の曳山高欄出来、曳山腰組作成。	
同四	辛巳	一八二一	西村太冲金沢へ出仕。	東上町曳山の腰組を作成。	
同五	壬午	一八二二	一三代前田斉泰襲封。	東上町曳山腰組作成。東下町大黒天左足新調。	
同六	癸未	一八二三		東上町曳山腰組作成。	
同七	甲申	一八二四		東上町庵屋台、前立上の重下木地出来。この年、八月祭礼は飾り山のみ。	善徳寺追手門を万福寺へ譲渡
同八	乙酉	一八二五	外国船打払令出る。		
同九	丙戌	一八二六			
同一〇	丁亥	一八二七	町奉行に品川左門就任	画工堀川敬周「馬」の絵額を神明宮に奉納。	その頃城端絹を江戸に移出。
同一一	戊子	一八二八			
同一二	己丑	一八二九	町奉行に武部掃部就任	大工町庵の中仕切欄間出来（現在使用せず）	
天保元	庚寅	一八三〇		西下町、曳山上の諫鼓鳥、太鼓出来。	西村太冲の気朔暦天覧に入る
同二	辛卯	一八三一	天保の大飢饉。		
同三	壬辰	一八三二		西下町山宿御神酒徳利一対新調。東下町曳山後屏作成（二代目荒木和助）。東上町庵屋台前立下の重塗出来、庵天井は景石画。	
同四	癸巳	一八三三	井波ヨイヤサ祭始まる		
同五	甲午	一八三四			

同 嘉永 二	同 三	同 弘化 二	同 一四 元	同 一三	同 一 二	同 一 一	同 一 〇	同 九	同 八	同 七	天保 六
己酉	丙午	乙巳	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未
一八四八 一八四九	一八四六	一八四五	一八四四	一八四二	一八四一	一八四〇	一八三九	一八三八	一八三七	一八三六	一八三五
外国船日本近海に出没 加賀藩で黒羽織党登用 される。		町奉行に遠田勘右衛門	水野忠邦失脚	西村太沖の墓碑を野田 山に建立。	保の改革で株仲間解散	町奉行に多賀数馬。天	町奉行に小幡主膳。 町奉行に織部左近。五 ヶ山への貸付は帳消。	町奉行に原五郎左衛門 四月、巡見上使来町。	町奉行に石野右近。 大坂に大塩平八郎の乱 一二代將軍徳川家慶。		
西上町曳山備品入箱、曳山上檀箱作成。 八月一六日は亮丸様の御初入につき、祭 礼を二三、二四日に行う。神明社の本殿	調。 出丸町布袋像治五右衛門隠居茂兵衛（雄 蔵）により修復。手足修復。胴、団扇新	曳き山は中止。	神明宮拝殿前の石燈籠成る。	町奉行巡見につき祭礼は九月に延期。 町奉行巡見につき祭礼は八月一八、一九 日に執行。					御改法につき曳き山なし。	画工堀川雪江「牡丹に孔雀。桐に鳳凰」 の絵額を神明宮に奉納。 不作につき曳き山なし。	五月二一日、西村太沖金沢に て死去、六九才。
善徳寺一六世速成院達亮（亮 丸）入寺。			善徳寺本堂前青銅金燈籠寄進				城端の貸方は大打撃をうける		九代目治五右衛門雄蔵「鯨に 鷺草蒔絵手付盆」を作る。		

同 三	文 二	万 延 元	同 六	同 五	同 三	同 二	安 政 元	同 六	同 五	同 四	嘉 永 三
癸亥	壬戌	庚申	己未	戊午	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌
一八六三	一八六二	一八六〇	一八五九	一八五八	一八五六	一八五五	一八五四	一八五三	一八五二	一八五一	一八五〇
町奉行に前田内蔵太、 屋台出来。	コレラ流行、福光に庵 屋台出来。	桜田門外の変。	行。ロシア船出沒。	前年につずきコレラ流 行。ロシア船出沒。	株仲間再興 藩主前田齊泰来町、善 徳寺に一泊。町奉行に 遠田勘右衛門。殿様盆 一四代將軍徳川家茂。 各地に打ちこわし。	黒羽織党政権失脚。 ペリー来航。 一三代將軍徳川家定。	加賀藩海防に着手。 町奉行に前田監物が就 任。	俟約のため曳き山行わす。 西下町曳山の堆黒の彫刻出来。曳山行わ す。以後安政五年まで七年間曳山祭中止 曳山行わす。	俟約のため曳き山行わす。 西下町曳山の堆黒の彫刻出来。曳山行わ す。以後安政五年まで七年間曳山祭中止 曳山行わす。	二月一九日、城端大火。 亮丸殿死去、四才。 天満宮で祭神菅公九五〇年祭 を執行。	拝殿の造営成る。
大工町曳山の地山幕新調（現在も使用）。	夜燈の寄進あり。	東上町曳山屋根まわり再調。 祭礼を閏八月一日に延期。神明社に常	東下町曳山の屋根再製。衣裳長持、御面 像、小木偶箱など六個改む。曳山祭再開	曳山行わす。	初穂を奉納。この年も曳山行わす。	曳山行わす。神明宮大鳥居建つ。扁額は 久我通久書。画工岡部再有「義経と弁慶」 絵額、画工雪隣「龍」絵額が奉納される。 曳山行わす。夕方より人形飾りつける。 藩主来町るとき、寺社与力が神明社へ御	曳山行わす。神明宮大鳥居建つ。扁額は 久我通久書。画工岡部再有「義経と弁慶」 絵額、画工雪隣「龍」絵額が奉納される。 曳山行わす。夕方より人形飾りつける。 藩主来町るとき、寺社与力が神明社へ御	曳山行わす。神明宮大鳥居建つ。扁額は 久我通久書。画工岡部再有「義経と弁慶」 絵額、画工雪隣「龍」絵額が奉納される。 曳山行わす。夕方より人形飾りつける。 藩主来町るとき、寺社与力が神明社へ御	曳山行わす。神明宮大鳥居建つ。扁額は 久我通久書。画工岡部再有「義経と弁慶」 絵額、画工雪隣「龍」絵額が奉納される。 曳山行わす。夕方より人形飾りつける。 藩主来町るとき、寺社与力が神明社へ御	絹方御取扱御銀裁許に池田勘 助、糸屋市左衛門が任命され る。善徳寺玄関門の上棟式。 一月、城端絹会所建つ。	地震のため瑞泉寺が宗林寺町 より野下町へ移転。 水月庵で若衆の手踊物真似興 行。塗師屋九代雄蔵死去、七 三才。
その頃、善徳寺住職は第一七											

同 五	同 四	同 三	同 二	明治 元	同 三	同 二	慶応 元	元治 元
壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子
一八七二	一八七一	一八七〇	一八六九	一八六八	一八六七	一八六六	一八六五	一八六四
学制発布。太陽曆採用 七尾県を廃し射水郡は 新川県に移管。	廃藩置県実施。知藩事 を廃し県令を置く。	大教宣布の詔勅出る。	新川郡にばんどり騒動 六月、版籍奉還を許す 九月に明治改元。	大政奉還、王政復古。 三月神仏分離令出る。	一四代前田慶寧襲封。 一五代將軍徳川慶喜。	町奉行、七月に不破京 二郎、藤懸床太郎、八 月に伊藤平左衛門就任	産物方役所設置。	前田式部（二人制） 二月、前田式部に替り 生駒勘右衛門が町奉行 八月に矢部順平就任。
彫刻に塗漆、塗箔。 出丸町の庵修復。東上町曳山上段の腰の 月一八日まで延ばす。	善徳寺の治姫様（前田家息女）八月一七 日に御旅所へお成りにつき、曳山祭を八	東上町曳山の天井完成。	凶作のため曳山を出さず、飾り山のみ。城 端神明社が村社に列す。	諒闇のため曳山を出さず、飾り山のみ。	西上町えびす講用の黒恵美須像桐箱出来	前田家若御前卒去につき曳山祭行わす。	九月に神明宮再建の遷座式。	
城端町に新川県砺波郡一区の 区会所設置。郵便取扱所設置	新川県に属す。	明治四年に邏卒と改称。 七月、金沢県に属す。一月	この頃、巡邏の屯所置かる。	今石動奉行所廃止、城端も砺 波射水郡奉行支配下に置かる 郡奉行所廃止、砺波郡治局を 設置。	産物方会所設立。	世速悟院勝心。 錢屋喜太郎（五兵衛長男）善 徳寺に参詣の後、自殺。		

城端曳山史年表

明治 六	癸酉	一八七三	徴兵令。地租改正条例 発布。バツタン装置を フランスより移入。	城端祭礼日変更。春祭を五月、秋祭を九 月とし、春祭に曳山・庵を練廻すことに なり、曳山順番も改正。東上町寿老像の 衣裳新調。	善徳寺内に小学校創設。その 頃、善徳寺一八世宝香院勝道 入寺。
同	七	甲戌 一八七四	一月、民撰議院設立建 白書提出。	春祭が五月一日に決定。画工山田金次 郎の「伊賀越道中双六」絵額が神明社へ 奉納。	城端町は新川郡第二五大区の 区会所所在地となる。
同	八	乙亥 一八七五	神仏合併の布教禁止。	東上町曳山車を大八仕立てに改造、川原 町への庵巡行、今町、中野下町への曳山 庵の巡行始まる。	小学校校舎が野下町に落成。
同	九	丙子 一八七六	廃刀令公布。新川県廃 止、越中全域が石川県 に属す。	神明社に「算題額面」奉納される。	善徳寺を城端別院と称する。 この年、笠原研寿東本願寺よ り英国に留学を命ぜられる。
同	一〇	乙丑 一八七七	西南の役	西下町曳山の堆黒彫刻（現在左右のもの） 新調、曳山腰廻りの大きさも改修。	石動警察署城端分署を設置。 金沢博物館へ治五右衛門蒔絵 を出陳。
同	一一	戊寅 一八七八	天皇北陸巡幸。砺波郡 役所を石動町に設置。	神明社の明細帳を調進。「和氣之清麿振 幣」絵額奉納。	戸長役場設置。一一代治五右 衛門得賀没、四五才。
同	一二	己卯 一八七九	府県会開かれる。コレ ラ流行。		
同	一三	庚辰 一八八〇	国会期成同盟を結成。		
同	一四	辛巳 一八八一	国会開設の詔勅下る。		
同	一五	壬午 一八八二	日本銀行開業。		
同	一六	癸未 一八八三	越中一円が富山県とな	西上町恵美須の胴型再調。	一〇代治五右衛門没、七八才 七月一六日、笠原研寿東京帝

明治一七	同 一八	同 一九	同 二〇	同 二一	同 二二	同 二三	同 二四	同 二五	同 二六	同 二七	同 二八	同 二九
甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申
一八八四	一八八五	一八八六	一八八七	一八八八	一八八九	一八九〇	一八九一	一八九二	一八九三	一八九四	一八九五	一八九六
る。初代県令国重正文 区町村会法改正。	内閣制度制定。	学校令発布。	大同団結運動起こる。 砺波郡役所出町へ移転 枢密院設置。	一八八八	大日本帝国憲法公布。 市制、町村制実施。	帝国議會開く。	大津事件。	第二回衆議院議員選挙	「文学界」創刊。	七月、日清戦争勃発。	四月、下関条約調印。	郡の分離廃置を実施。
神明社に素謡奉納額。	西上町恵美須装束新調。出丸町庵一部新調。	神明社へ和歌短冊額奉納。東上町曳山の地山の幕新調。	大工町庵水引新調。東上町庵前立下の重修理、庵石垣新調。	西下町庵屋台新調。	米価騰貴のため曳山は出さず、庵のみ巡回。	出丸町庵屋台修理のため寄付金を集め始める。東上町祭礼用提灯新調。				東上町曳山人足用ハッピ新調。神明社へ「三六歌仙図」押絵額奉納。	西上町庵修理、傘鉾新調。西下町曳山屋	善徳寺虫干法会始まる。七月
国大病院で死去、三一才。 官選戸長制度となる。			出丸町一九戸焼く。善徳寺経藏上棟式。	城端町町会議員選挙。五月、町長に栗山半蔵就任。	七月、町長に荒木文平就任。			八月、町長に斉藤龍二郎就任 城端生絹組設立。	生絹組改組。砺波銀行設立。 公設の消防組設立。	城端尋常小学校と改称。六月町長に上田義男就任。その頃 バツタン機導入。		

明治三〇	丁酉	一八九七	中新川、氷見、東砺波 西砺波の各郡を新設。 荒木文平県議に当選。 「ホトトギス」創刊。 中越鉄道一〇月開通。	根改修・警察分署竣工式に庵屋台を出して祝賀。	警察分署庁舎竣工。十一月、町長に松本才喜就任。
同 三一	戊戌	一八九八	隈板内閣成立。城端大火。能美村が北野、養谷両村に分割。	大工町曳山大火により焼失。曳山祭中止。神輿の巡幸のみ。	一月、町長に岡部長左衛門。 四月一五大火、焼失家屋二八二戸、三三四棟。
同 三二	己亥	一八九九	敦賀、富山間鉄道開通 七月荒木文平県議当選	東下町大黒天衣裳新調。出丸町庵修復起工、彫刻の欄間と重出来上る。大工町人形胴新調。	
同 三三	庚子	一九〇〇	治安警察法公布。	大工町山藏秋葉神社前に竣工。東上町曳山の地山幕出来。東上町傘鉦新調。	一〇月一九日西上町大火、約六〇戸焼失。
同 三四	辛丑	一九〇一	八幡製鉄所操業。	不景気により緊縮して曳山を出す。	
同 三五	壬寅	一九〇二	日英同盟調印。	大工町人形胴修繕完成。東下町曳山人足二二人。庵人足四人、人足賃三五銭、酒三斗四升。	絹織物共同販売所設立。一二 月町長に大岡小兵衛就任。
同 三六	癸卯	一九〇三	岩井藤三郎県議当選。	東上町庵天井の表具修復。	
同 三七	甲辰	一九〇四	二月、日露戦争始まる	飾り山だけで曳山は出さず。西上町山藏新築のため年間一〇〇円以上積立を始め	神明社へ古カブト奉納。豊作
同 三八	乙巳	一九〇五	九月、ポーツマス条約	曳山祭中止。神輿巡幸も取止め。	

同 二	明治三九	丙午	一九〇六	三月、鉄道国有法発布	大工町曳山新調。出丸町曳山車新調。東下町傘鉾頂花・小槌箱新調。	立野ヶ原廠舎竣工。羽二重と縋の製織導入。一二月町長に岡部長左衛門が就任。
癸丑	同 四〇	丁未	一九〇七	富山に歩兵三一旅団・六九連隊を新設。九月岡部長左衛門県議当選	東上町曳山車新調。曳山修理。大工町曳山前部彫刻出来。出丸町曳山車塗装。その頃西下町曳山車新調。天神千年祭に傘鉾参加。	城端神明社神饌幣帛供進神社に指定。城端神明社敬神会設立。六月柳田国男来町。西新田町火事、一〇戸焼失。
一九一三	同 四一	戊申	一九〇八	東宮殿下福野町へ行啓	西下町曳山の屋根塗上げ。大工町庵屋台新調。東上町曳山金具新調、補足。	城端織物組合設立。
	同 四二	己酉	一九〇九	日韓併合。国定教科書変る。北野村大火。	西上町山蔵買入れる。東下町庵屋台修理	城端へ電話導入。力織機導入
	同 四三	庚戌	一九一〇	第二次条約改正（関税自主権回復）	出丸町梯子乗人形、笛吹唐童子衣裳新調からくり復活。	一二月町長に岡部長左衛門。
	同 四四	辛亥	一九一一	明治四五年七月三〇日以降、大正元年となる	東上町庵屋台水引幕新調（正絹縮緬紫地波鶴模様）。出丸町庵屋台の重新調。	俳画家富田溪仙来町。
大正元	同 四四	壬子	一九一二	明治四五年七月三〇日以降、大正元年となる	西下町曳山塗上げ、曳山後屏「竹に鶏」出来。出丸町曳山後屏彫刻「司馬温公」出来。東上町曳山腰組、腰彫作成。二重屋根を増補。西上町曳山二重雛台金箔塗上げ。五月の神明社大祭に初めて奉幣使参詣。出丸町の古い庵屋台を津沢へ売却諒闇のため曳山は出さず。	俳人河東碧梧桐来町。神明社境内に忠霊碑竣工。済美青年会結成。
同 二	同 二	癸丑	一九一三	北陸線、直江津まで開	諒闇のため曳山は出さず。	城端町、内務大臣より表彰。

大正三	甲寅	一九一四	第一次世界大戦勃発。	道
同四	乙卯	一九一五	天皇即位大典祝賀会。 俳誌「海紅」発刊。 九月、宮岡幸次郎、石村正友県議に当選。	西上町曳山の水波彫刻新調するも使用せず。西上町庵屋台水引幕新調。神明社に石燈籠。
同五	丙辰	一九一六	工場法を施行。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。西上町庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工。出丸町への曳山進入問題起こる。東下町曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」の腰欄間取付け。
同六	丁巳	一九一七	金輸出禁止。石井・ラシンング協定。	西下町曳山腰廻り。高さ改修、彫刻取付け。西下町傘鉾新調。出丸町曳山「唐子」「水波」の彫刻出来。西上町の古い庵屋台を出町川原町（現在の砺波市中央町）へ売却。
同七	戊午	一九一八	シベリア出兵。米騒動	神明社絵馬堂雪のため崩壊。大工町秋葉神社前の山蔵を坡場の現在地に移し、解体せずに収納できるようになる。出丸町曳山塗箔加工。
同八	己未	一九一九	ベルサイユ条約調印。	「城端商工時報」発刊。城端機業・越中絹織・城東機業・城端織物の各株式会社設立。筏スキークラブ設立。 二月、町長に荒木文平就任
				城端町に電燈導入。 二月、町長に矢部豊吉就任。 大谷貞子死去、二五才。 筏スキー誕生。五月に天満宮競書大会始まる。九月、町長に伊藤己之助就任。 善徳寺で盤持大会始まる。済美青年会を城端青年会と改称。出丸町道路を改修。

城端曳山史年表

大正 九	庚申	一九二〇	第一回国勢調査実施。	東下町曳山車改修。神明社に狛犬出来。	青年会に救護班組織。三月、越中絹織株式会社出火全焼。
同 一〇	辛酉	一九二二	原首相、東京駅で暗殺さる。ワシントン会議	東下町曳山に唐子彫刻出来。出丸町曳山の唐子彫刻・水波・鷺彫刻に塗箔彩色。東上町曳山の地山巴紋額新調。曳山腰彫の波・鶴を塗上げ。東上町庵屋台の重・欄間新調。東上町傘鉾の「鶴」に塗箔。	
同 一一	壬戌	一九二二	海軍軍縮条約調印。	西上町の曳山車に「波に鯛」の金具取付け。庵屋台の欄間一二枚新調、曳山修理大工町曳山後屏を彩色。東下町曳山修理幕入箱新調。出丸町前年負傷の曳山人足死去。	城端町立平和記念図書館開設
同 一二	癸亥	一九二三	関東大震災	大工町曳山の両腰及び後部の彫刻出来。出丸町傘鉾の上下新調。	二月、町長に鍋田祥平就任。
同 一三	甲子	一九二四	第二次護憲運動起こる 北陸大演習に摂政宮来 県。	西下町堯王像の衣裳新調。西上町曳山屋根一部修理、神饌用大皿新調。東下町庵屋台修理壁板四枚に彫刻。東上町曳山四本柱塗替、曳山車に金輪入替。神明社の絵馬殿再建。	「城端時報」発刊。城端別院で聖徳太子千三百回忌大法要町立幼児託児所を別院詰所で開設。東新田稲荷社遷宮式。
同 一四	乙丑	一九二五	治安維持法、普通選挙 法公布。二月九日、五 ヶ山道路起工式。	東下町曳山の車完成。西上町神饌用小鉢一対新調。神明社境内の妙義神社の鳥居建つ。東上町綾織人形衣裳新調。	中塚一碧楼初めて来町・俳誌「地獄谷」発刊。南山田村野口地内で縄文式土器発掘。むぎや新声会発足。

昭和元	丙寅	一九二六	大正一五年二月二十五日以降昭和となる。	東上町曳山地山、庵重の飾金具新調。西下町曳山長押の金具出来。西下町堯王像の古い衣裳を売却。	五月、町長に宮岡周三郎就任。神明社二の鳥居建立。出丸町東側三戸焼失、一戸半焼。
同二	丁卯	一九二七	金融恐慌。山東出兵。九月、黒川由次郎県議に当選。十一月、八幡道路開通。	諒闇につき曳山は出さず。	御真影奉安庫建立。大雪一三尺（三・九米）。大工町警察署長官舎出火。砺波銀行が高岡銀行に併合される。七月、能狂言保存会生まる。
同三	戊辰	一九二八	張作霖爆死。新川地方に電気料値下げ運動起こる。	西上町山宿用幕新調。東上町山宿用三方新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行う。	二月五日、東久邇宮殿下来町。四月、町長に宮岡周三郎就任。十一月一日、西村太冲正五位を贈らる。十二月、町長に大岡小兵衛就任。
同四	己巳	一九二九	世界経済恐慌起こる。	大工町庵の水引幕新調。出丸町への曳山進入問題再燃、道路閉鎖事件起こる。	
同五	庚午	一九三〇	金解禁実施。	東下宝槌会、金沢放送局より「城端の夕」と題して庵唄「五月雨」を録音放送。神明社へ大歌舞伎絵額奉納される。	九月、町長に大岡小兵衛就任。
同六	辛未	一九三一	満州事変起こる。	西上町恵比須用鯛入桐箱新調。出丸町への曳山進入問題解決。曳山祭の映画を撮影。	
同七	壬申	一九三二	上海事件、五・一五事件起こる。		神明社の社号標成る。
同八	癸酉	一九三三	国際連盟脱退。	大工町関羽、周倉像衣裳新調。神明桜献影。	城端小学校雨天体操場落成。

城端曳山史年表

同 一八	同 一七	同 一六		同 一五	同 一四	同 一三	同 一二	同 一一	同 一〇	昭和 九
癸未	壬午	辛巳		庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌
一九四三	一九四二	一九四一		一九四〇	一九三九	一九三八	一九三七	一九三六	一九三五	一九三四
行発足。 アツツ島玉砕。北陸銀	詔奉戴日制定。 ミッドウェー海戦。大	太平洋戦争勃発。 ミッドウェー海戦。大		紀元二千六百年祝賀式	第二次世界大戦始まる 日独伊三国同盟締結。	国家総動員法公布。 第二次世界大戦始まる	日中戦争勃発。	二・二六事件起こる。	富山放送局開局。城端 五ヶ山バス開通	九月、室戸台風。
祭礼中止。神輿渡御もなし。	飾り山のみ。神明社参道に石灯籠建つ。	飾り山二日間。浦安の舞始まる。	樹。	神明社、浦安の舞装束出来る。	紀元二千六百年記念として曳山祭執行。	曳山祭中止、飾り山二日間。 曳山は町内のみひき廻し、飾り山。	東下町大黒天像衣裳新調。富山放送局、 曳山祭のラジオ実況放送をする。	五月、城端祭礼映画撮影。	腰板（木瓜形中板）堆朱塗出来。 東下町庵屋台の欄間一〇枚新調。西上町 山蔵戸前改築。	出丸町布袋像、旗持唐童子衣裳、南天寿 の旗、庵屋台の重、水引幕新調。西上町
企業整備、統制経済体制を強 化。	町長に西川栄一就任。	県下の織物工業組合を統合。 織物組合飛行機献納。一月 町長に西川栄一就任。	二月、町長に西川庄太郎就任 西村太冲碑、神明社境内に建 立。東下町地藏堂建立。	防団発足。	各工場で産業報国会結成。警 防団発足。	一月、町長に清水与八就任。	四月、城端別院大法要・大谷 光暢法主来町。善徳婦人会発 足。西新田町火事、五戸類焼	四月、城端別院大法要・大谷 光暢法主来町。善徳婦人会発 足。西新田町火事、五戸類焼	四月、城端別院大法要・大谷 光暢法主来町。善徳婦人会発 足。西新田町火事、五戸類焼	四月、城端別院大法要・大谷 光暢法主来町。善徳婦人会発 足。西新田町火事、五戸類焼

昭和一九	甲申	一九四四	東条内閣総辞職。	神輿渡御、飾り山二日。東下町打出小槌修理。	東京都常磐松小学校児童疎開
同 二〇	乙酉	一九四五	ポツダム宣言受諾。	城端神明社、五月に郷社昇格、七月に慶賀祭。	城端神明社誌刊行。
同 二一	丙戌	一九四六	天皇人間宣言。日本国憲法公布。	午後より曳山祭執行。神輿、両新田町へも渡御。神輿の御台付神楽は各町内一カ所とする。	二月、城端時報再刊。
同 二二	丁亥	一九四七	日本国憲法施行。六三三四制の新学制実施。	宵宮の御旅所も復活。祭礼の世話係として各町内二名の神社委員を委嘱。	一月一八日、国民体育大会スキー予選大会を立野ヶ原で開く。四月、町長に天富直次。自治体警察制度発足。
同 二三	戊子	一九四八	新祝祭日を決定。	朝から神輿巡幸。各家毎のお台付神楽も復活。	南砺厚生病院設立。
同 二四	己丑	一九四九	法隆寺金堂炎上。	東下町曳山修理、曳山の雛台新調、地山総塗仕上、庵屋台修理、前格子新調。	城端町役場庁舎、大工町に建設。
同 二五	庚寅	一九五〇	朝鮮動乱勃発。ジェーン台風の被害。	西上町曳山車軸台新調。	四月、町長に天富直次当選。
同 二六	辛卯	一九五一	サンフランシスコ講和会議。四月、黒川義明県議に当選。	出丸町曳山金具新調。	九月、麦屋祭始まる。この年省営城端バス開通。
同 二七	壬辰	一九五二	平和条約発効。	東上町寿老像御面像修理。東下町大黒天像腕修理、山藏敷地譲渡。	五月、町村合併、町長に天富直次就任。
同 二八	癸巳	一九五三	台風一三号通過で県下大被害。	西下町曳山地山の彫刻幕板出来、車軸台	第一回城端区域町村議員協議会を上平村で開く。
同 二九	甲午	一九五四	日米相互防衛援助協定		桜ヶ池の竣工式挙行。

城端曳山史年表

同 三三	戊戌	一九五八	第一三回国体、富山県で開催。NHK富山テレビ放送開始。	大工町曳山車を塗漆。	第八回中部日本スキー選手権大会、高松宮殿下来町。
同 三二	丁酉	一九五七	日本経済「神武景気」となる。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋根張替。	出丸町地藏堂新築、荒田町島開発実施。
同 三一	丙申	一九五六	国連加盟。魚津に大火。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体して塗上げを始める。	東下町舗装工事、街路灯建設六月、町長に天富直次。一月、善徳寺山門修復落慶式。
昭和 三〇	乙未	一九五五	四月、山田伊作県議当選。	東下町曳山の芯木を準備。	東下町舗装工事、街路灯建設六月、町長に天富直次。一月、善徳寺山門修復落慶式。
同 三五	庚子	一九六〇	日ソ国交回復。日本、国連加盟。魚津に大火。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体して塗上げを始める。	東下町舗装工事、街路灯建設六月、町長に天富直次。一月、善徳寺山門修復落慶式。
同 三六	辛丑	一九六一	日米安保新条約調印。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体して塗上げを始める。	東下町舗装工事、街路灯建設六月、町長に天富直次。一月、善徳寺山門修復落慶式。
同 三七	壬寅	一九六二	四月山田伊作県議当選。イタイイタイ病問題化。	東下町曳山の芯木完成。	東下町舗装工事、街路灯建設六月、町長に天富直次。一月、善徳寺山門修復落慶式。
同 三八	癸卯	一九六三	記録の豪雪。黒四ダム富山空港完成。一〇月	簡易水道工事のため曳山練廻し中止。東下町山蔵移転改築工事完成。大工町笛四本新調。	三月、別院開祖七百回忌法要四月、町簡易水道完工。

昭和三九	甲辰	一九六四	山田伊作県議当選。 東海道新幹線開通。東京オリンピック開催。	この年より春の祭礼を五月二五日に変更 山宿に由来書の立札、宵祭の曳山に点灯 して公開。東下町大黒天像左足改修。西 上町恵比須像緋袴新調。西下町山宿用神 事幕新調。	六月、町長に天富直次。
同 四〇	乙巳	一九六五	日韓条約調印。	曳山の順路大改革。出丸町傘鉾水引幕新 調。東上町永年勤続曳山人足表彰。	町立厚生病院新築工事着工。
同 四一	丙午	一九六六	「国民の祝日改正案」 条件付可決。	五月の曳山祭を城端町文化財に指定。東 上町庵屋台にゴム車取付。東下町屋台屋 根張替、町内半纏新調。	厚生病院本館竣工。朝間野球 開始。
同 四二	丁未	一九六七	四月山田伊作県議当選 一〇月、吉田茂国葬。	西下町傘鉾を改装。西上町の古恵比須像 野村満花城より寄贈。東上町山蔵を新築 移転。	城端神明社の渡り廊下竣工。
同 四三	戊申	一九六八	小笠原復帰。日中覚書 貿易始まる。富山新港 開港。公害条例制定。	西上町恵比須像装束新調。曳山祭写真コ ンクール開催。	野村満花城死去、八一才。松 本謙三・人間国宝記念能楽大 会。六月、町長に天富直次。
同 四四	己酉	一九六九	天皇・皇后両陛下下行幸 啓、砺波市頼成山で第 二三回全国植樹祭。立 山トンネル貫通。	西下町曳山雨覆テント新調。西上町曳山 庵人足用半纏三五枚新調。東上町先囃子 新調。五月二六日、曳山・庵屋台天覧に 浴す。	五月二六日、天皇・皇后両陛 下、縄ヶ池に水芭蕉の群生を 見学のため御来町。神明社に 明治百年記念の茶室建つ。
同 四五	庚戌	一九七〇	万国博開催。米の生産 調整始まる。		国道三〇四号線昇格祝賀会。 善徳寺創立五百年大法要。

昭和四六	辛亥	一九七一	両陛下御訪欧。山田伊作、四月に県議当选。五月、県会議長就任。日米繊維交渉妥結。	西下町山宿用八脚、三方、庵屋台水引幕新調。東下町地山四隅柱に金具取付け。東上町曳山人足用半纏三五枚新調、永年勤続人足表彰。大工町旧役場を神輿の御昼所として改修。	神明社境内の妙義神社改修。神明社に掲揚柱建つ。
同 四七	壬子	一九七二	沖繩返還実現。日中国交正常化。	曳山祭を五月一日に復帰。西下町曳山上の「唱天徳」の旗、代用のものを作成	六月、町長に田嶋茂当选。神明社本殿防蝕設備、外玉垣成る。
同 四八	癸丑	一九七三	北陸自動車道一部開通 石油危機起こる。	城端神明宮御遷座四百年祭。神明社祝詞殿、斎殿、洗心舎成る。浦安の舞装束新調。出丸町傘鉾の傘新調、山蔵新築。	小学校創校百年記念式挙行。町役場新庁舎落成。曳山史編纂開始。
同 四九	甲寅	一九七四	フォード米大統領訪日 五月梨谷トンネル完成	東下町の逆立人形のからくりを修理。東上町庵屋台、富山市立郷土博物館での「治五右衛門塗、城端蒔絵四〇〇年記念展」に出展。西下町曳山車軸台大改修。西上町曳山屋根修理、屋根紙張替。曳山功労者碑建設、庵唄奉納、餅まき等あり。	西原（示野）で縄文中期中葉の住居集落跡発掘。永六輔等来町、第一回城端落語会開催 九月、高岡市立美術館で「谷聴泉展」。
同 五〇	乙卯	一九七五	エリザベス英国女王訪日。四月、河合常則県議当选。一〇月、両陛下訪米。	東上町寿老像衣裳新調。出丸町曳山人足用半纏四〇枚新調。西上町曳山、庵人足用半纏三〇枚新調。西下町曳山上の太鼓に止まっている「諫鼓鳥」改装、曳山標旗新調。五月、城端別院縁の下より安永四年の曳山車騒動を伝える西上町曳山の	塔尾、西山地区で縄文中期中葉の住居址が発掘される。九月、高岡市立美術館で「野村満花城遺作展」開催。「城端の夢を語る会」発足。

昭和五一	同 五二
丙辰	丁巳
一九七六	一九七七
ロッキード事件問題化。 中国に政変。	豪雪。日ソ漁業交渉難 行。有珠山爆発。王選 手ホームラン世界記録。
<p>車が発見される。 東下町曳山天井、屋根裏金箔塗上げ、屋根張替。一二月、砺波市中央町より庵屋台（大正六年に西上町が譲渡したもの）が城端町へ復帰。</p> <p>十一月二八日曳山連合会、曳山史編集委員会会員一同、美術工芸作家協会の共催で荒木和助一七〇年祭式典を挙行。</p> <p>庵宿に由来書の立札を建てる。「城端曳山史」脱稿。</p>	
六月、町長に田嶋茂再選。	三月、善徳寺寺宝展を県民会館で開催。六月、麦屋節新声会創立五〇周年記念「北陸民謡大会」を町社会体育館で開催。

参考文献

日本の祭
古代研究・日本の年中行事
日本人形史
東洋の歴史
高岡御車山と日本の曳山
神と祭りと日本人
八王子の曳山祭
御觸書寛保集成
加賀郷土辞彙
加賀藩史料
金沢市史(大正一四年刊)
石川県の歴史
富山県の歴史
富山県の歴史
富山県の曳山
越中史料
高岡史料
高岡市史
魚津市史
新湊市史
砺波市史

柳田国男著
折口信夫著
山田徳兵衛著
外比野丈治編
伊勢宗治編
牧田茂著
相原悦夫著
高柳真三編
石井良助著
日置謙著
前田育徳会
下出積興著
坂井誠一著
富山県教育委員会

小矢部市史
八尾町史
福野町史
井波町史
福光町史
城端町史
城端神明社誌
治五右衛門と城端時絵
明治以降の城端の絹織物業
(富山史壇五五・五八・五九・六〇号)
洲崎哲二編
洲崎哲二編
高瀬保著
城端時報
南砺時事
組中人々手前品々覚書帳(元禄六年)
畑家文書
荒木家文書
出丸町文書
伊藤家文書
小原家文書

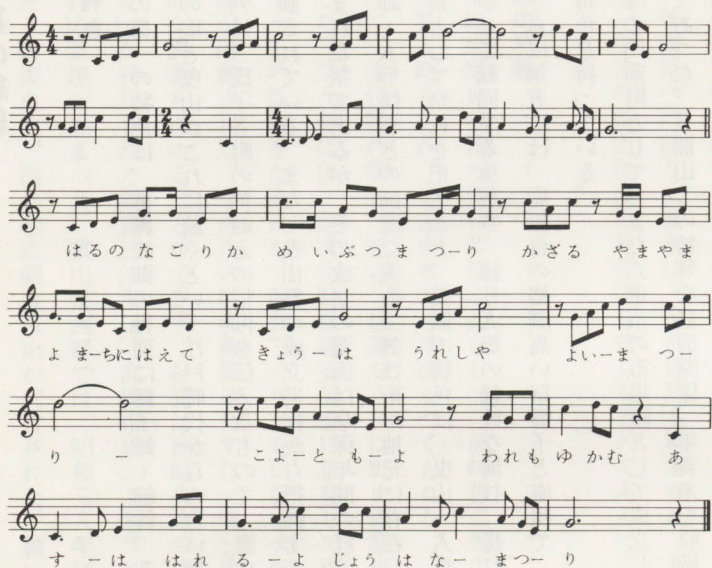
このほか、山町六か町の所蔵文書を利用させてもらった。

城 端 祭

中川 秋羅 作曲

(1937.5.15)

前 奏



はるの なごりか めいぶつまつーり かざる やまやま
 よま-ちにはえて きょう-は うれしや よい-ま つー
 り - こよ-と も-よ われも ゆかむ あ
 す-は はれ る-よ じょうはな-まつーり

城 端 祭

野村 満花城 作詞
 中川 昌 作曲

一、春の名残りか名物祭

かざる曳山々々 夜街に榮えて

今日はうれしや 宵祭

来よ友よ 吾も行かむ

明日は晴れるよ 城端祭

二、

みこし鉦傘 庵や 曳山や

桐の花咲く街々めぐり

ああ ゆかしや篠笛の音色

唄に三絃にもつれ泣くよ

春の名残りか 城端祭

三、

夜の曳山 戻りの庵

つるす提灯 ゆら／＼ゆれて

帰り囃子の 流れ行く

いつまでも 耳に聞ゆ

春を惜しむか 城端祭

曳山史編纂の経緯

曳山祭の特色

城端曳山祭の第一の特色は、神輿渡御の行列に獅子舞・劔鉾、それに八本の傘鉾などが三基の神輿を先導し、それぞれ六台の庵と曳山がこれに続くという江戸時代からの古い祭礼形式を現在も保持していることである。

特に傘鉾の行列は、氏子各町の神迎えの信仰を伝えるもので、富山県に現存する唯一の祭礼文化財・民俗資料として高く評価されている。また、曳山祭の成立過程から把握すると、第二の特色は、豊かな町人の経済力を背景として生まれた祭であるが、その成立の要因は享保年間の経済不況打開の願いからであったこと、第三には、大工・塗師・人形師などの高度な美術工芸技術が地元が存在していたことがあげられる。そして、見せる祭・聞かせる祭として祭礼を把えようと、第四の特色は、曳山・人形・庵の美術工芸的価値、曳山車の軋り音や屋根を揺り傾かせて転回する勇壮さ、操り人形の軽妙な演技、提灯山と庵囃子が醸し出す夜祭の情緒の素晴らしさである。さらに第五には、庵屋台の格調高い祭囃子と庵唄で、若者たちが芸を競い合う祭として、他所には類をみない特色を持っている。

城端は善徳寺の門前町として、また六歳市の市場町として成立し、付近農村からの来住者の増加によって発展した郷町であった。五箇山との特殊な経済関係、年貢米を収納する御蔵や藩士の知行米を取扱う蔵宿の存在、今石動町奉行の支配する町方として近隣の福光・福野・井波などの宿方とは異なる取扱いを受けたことも、

このような特異な祭礼を成立させた要因と考えられる。

城端町民の曳山祭への誇りと愛着は、明治以降も継承され、さらに豪華な曳山祭を形成することになった。そしてこれが、今日の曳山史編纂事業にも連らなるのである。

曳山史編纂の気運

昭和二〇年に城端神明社の郷社昇格を記念して、洲崎哲二先生が「城端神明社誌」を編纂された。その中で曳山関係の史料も紹介され、曳山史解明の基礎がつくられた。

昭和二八年に、文化財の調査・選定・保護ならびに町史編纂事業の実施を目的として、城端町文化財保護委員会が発足した。二九年には、県文化財保護委員会に依頼して曳山祭の調査も行われ、曳山祭を県文化財の指定に申請しようとの協議もなされた。昭和三一年からは富山大学の坂井誠一先生に監修を委嘱して、本格的な町史編纂事業が開始された。その後の町史編纂過程では、各分野にわたる調査を急いだので、特に曳山祭についての組織的な調査を進めることができず、結局は洲崎先生の従来の研究調査の域に止まるを得なかった。

「城端町史」が刊行された昭和三四年は、高岡市史（上巻）や小杉町史も編纂され、これを境として各地で市町村史刊行の気運が高まった。富山県西部では、昭和三八年に大島村史・氷見市史・高岡市史（中巻）、三九年に福野町史・新湊市史、四〇年に砺波市史が刊行された。続いて四四年に福岡町史・高岡市史（下巻）、四五年に井波町史（上下巻）、四六年に小矢部市史（上下巻）・福光町史（上下巻）なども編纂された。

その間、富山県東部でも相ついで編纂事業が進められ、昭和四二年には八尾町史も刊行されている。すでに

八尾の曳山神事は三八年に県文化財民俗資料に指定され、当時の町長橋爪辰男氏は四〇年に「八尾曳山史」を出版された。このようなことが刺激にもなって、「城端曳山史」の編纂を要望する声が高まったのである。

曳山史編纂の歩み

昭和四八年二月の「町長と語る会」で、田嶋茂町長は「城端曳山史」の刊行を約束し、五月一〇日に曳山史編纂準備協議会が開かれ、直ちに編纂委員会が発足した。「城端町史」と同じく富山大学の坂井誠一教授に監修をお願いし、編纂方針も決定した。その大要は次の三点であった。

(一) 曳山祭の成立・発展・継承の過程を、政治・経済・文化の背景と関連させて総合的に把握するとともに、曳山・庵・傘鉦などの特色・構造・制作事情などを調査し、その保存に役立てる。

(二) 曳山祭の実態を把握し、その特殊性と民俗資料としての重要性を明確にするとともに、県文化財に指定申請のための資料とする。

(三) 資料は、文献・記録・箱書・裏書などできるだけ広範囲に収集するとともに、古老の言い伝えや伝説なども無視しない。また、記述はなるべく平易な表現を用い、多数の人々に愛読されるものにする。

五月一四日・一五日の祭礼には、各町担当の委員によって基本調査が行われ、引続き四九年・五〇年にも調査は継続された。その間、執筆・編集の作業を進めるために常任編纂委員を選任し、体裁はA5判、内容は三五〇頁前後、刊行は昭和五一年五月、という方針を定めた。

執筆は、第一章を監修の坂井先生にお願いし、第二章以下は常任編纂委員全員で検討しながら記述すること

にした。特に第八章以下は、主に一四代治五右衛門小原白照氏が執筆を担当した。また、曳山・庵の構造図は米原金治郎、写真収集は松嶋外茂治、年表作成は梅本富成の各氏が分担した。しかし、記述作業を進める中で内容が著しく拡充したため、編集計画は大幅に修正せざるを得なくなった。その結果、まず昭和五二年度に第一〇章までを上梓し、以下は続篇として次年度以降の事業とすることにした。

城端の誇る伝統のある曳山祭を、どのように継承し保存していくかは、今後の大きな課題であるが、この問題にも心を配りながら、続篇には「人形」や「庵屋台」の章などを収録し、さらに補足・訂正事項を追記して、各位の御期待に添いたいと存じます。今後とも一層の御鞭撻・御援助を賜わるようお願い致します。

細川 健太郎

城端曳山史編纂委員会

委員長

田嶋 茂

監修

坂井 誠一

編集主任

細川 健太郎

常任委員

小原 白照

同

梅本 富成

同

金田 健治

同

嶋谷 文雄

同

柄折 雄次

同

藤崎 仲夫

同

藤沢 太四郎

同

松嶋 外茂治

同

米原 金治郎

委員

河合 常則

同

松嶋 直重

同

村田 英一

同

安居 憲一

資料提供

伊藤 克巳

岡部 宇一

洲崎 元丸

畑 憲二

河合 喜代志

富井 義輝

西野 孝雄

堀越 秀一

和田 安三

協力団体

城端町文化財保護委員会

城端神明宮敬神会

城端町曳山連合会

城端町庵連合会

事務局

岩田 正治

斉藤 耕三

西井 初郎

城端曳山史

昭和53年 5 月 10 日 印 刷
昭和53年 5 月 15 日 発 行

編 纂 城端曳山史編纂委員会

発 行 城 端 町
富山県東砺波郡城端町

監 修 富山大学教授
文 学 博 士
坂 井 誠 一

印 刷 牧 印 刷 所

